

令和5年7月

第1回白山市総合教育会議

会 議 録

白 山 市

# 令和5年度 第1回 白山市総合教育会議

日 時 令和5年7月10日（月）午後3時

場 所 白山市役所4階 402会議室

## 1 開 会

## 2 市長あいさつ

## 3 協議事項

- (1) 世界ジオパーク認定に伴うジオパーク学習について
- (2) 中学校部活動の地域連携及び地域クラブへの移行について
- (3) その他

## 4 閉 会

## 出席委員

白山市長	田村敏和
白山市教育長	清水茂
白山市教育長職務代理者	竹内千恵子
白山市教育委員	北田朋幸
白山市教育委員	小寺正彦
白山市教育委員	尾張勝也
白山市教育委員	安川薫

---

## 事務局出席職員

教育部長	山内満弘
教育総務課長	米木伸一
学校教育課長	藤法生
学校指導課長	東海林幸男
生涯学習課長	中村繁樹
子ども総合相談室長	浅香弥生
松任図書館長	三谷哲史
教育総務課長補佐	長島史晃
教育総務課係長	山崎有香
ジオパーク・エコパーク推進課長	山口昭恵
文化課長	小中和也
スポーツ課長	滝田秀樹

---

傍聴者 2名

## 開会 午後 3時00分

### ○教育総務課長（米木 伸一）

定刻になりましたので、ただいまより令和5年度第1回白山市総合教育会議を開催いたします。

---

### ◎市長挨拶

### ○教育総務課長（米木 伸一）

本日の会議につきましては、非公開とする内容はないと考えられますので、原則どおり本日の会議を公開したいと思いますが、よろしいでしょうか。

### ○構成員

異議なし

### ○教育総務課長（米木 伸一）

それでは公開といたします。

開会にあたりまして、田村市長からご挨拶をお願いしたいと存じます。  
よろしく願いいたします。

### ○市長（田村 敏和）

本日は、令和5年度第1回白山市総合教育会議の開催にあたりまして、委員の皆様方にはお忙しい中ご出席をいただき、誠にありがとうございます。また、皆さま方には、日ごろから白山市の教育行政にお力添えを賜り、心から感謝を申し上げます。

私も立場が変わり、今回より総合教育会議の主宰者として、協議につくことになりました。急逝されました故山田市長の意思を引き継ぎ、さらには、私の強い思いであります子育て環境を充実させることにより、少子化対策を実行し、未来につなげて参りたいと考えております。

教育委員会におきましても、5月に清水教育長を任命させていただきました。学校教育をはじめ、社会教育と教育行政に関する豊富な経験と卓越した識見を有していらっしゃいます。新体制のもと、白山市の教育がさらに充実、発展していくことを期待するものであります。

さて、5月24日にフランス、パリで開かれましてユネスコ執行委員会におきまして、白山手取川ジオパークが世界ジオパークに認定されました。当日は、教育委員の皆様にもお集まりいただきまして、ともに喜びを分かち合ったところでございます。この世界認定には、教育にどう取り組まれているかも重要なポイントでありました。この教育委員会でも引き続き、取り組んでいくべき課題であり、本日のテーマのひとつとしていただいております。

もうひとつのテーマは、中学校の部活動についてであります。文科省より、令和5年度から中学校の土日祝日の部活動を学校から地域に移行する提案が示されたことにより、昨年8月に開催しました総合教育会議におきましても皆さまからご意見等を頂いております。その後、新たに国からの指針が示されたことと併せ、本市で検討や協議を重ねており、本日はそうした経過等のご報告と、今後の進め方について、改めて委員の皆様のご意見の忌憚のないご意見をいただきたいと考えております。それでは、どうぞよろしくお願いたします。

### ○教育総務課長（米木 伸一）

ありがとうございました。

これより協議事項に移りたいと思います。議事の進行につきましては、主宰者であります市長にお願いしたいと思います。それでは、市長よろしくお願いたします。

---

### ◎協議事項

#### ○市長（田村 敏和）

それでは、協議事項に入ります。本日の議題は二つあります。

一つ目は、世界ジオパーク認定に伴うジオパーク学習について、二つ目は、中学校部活動の地域連携及び地域クラブへの移行についてであります。

まず、協議事項（1）世界ジオパーク認定に伴うジオパーク学習について事務局より説明をお願いいたします。

**○学校指導課長（東海林 幸男）**

**○生涯学習課長（中村 繁樹）**

（資料にて説明）

---

**◎意見交換**

**○市長（田村 敏和）**

ただ今、事務局からの説明が終わりました。

このことについて、教育委員さんからご意見を伺いながら進めていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。安川委員さんから、お願いします。

**○教育委員（安川 薫）**

まず生きるためには、水が最も重要であるということは皆さんご承知のとおりだと思います。その水と人々のかかわりをテーマとした感性のびのびジオ・サタデーでは、対象が小学校4年生から6年生となっておりますが、今後の取り組みとして中高生などに活動の機会をもたらすこと、言い換えれば、若い世代が生まれ育った地域について当事者として内側からかかわりをもつことで、より社会体験、文化的体験、自然体験といった多方面からのアプローチが可能になることが期待できるのではないかと思います。ジオパーク学習の中で、きちんと中身を整備していくことや安全性などを考えるのはもちろん必要なのですが、学習ですので、やはり、まずやってみる、やってみたいということをいかに促すかということがとても大切だと思います。便利な世の中なので、少し手を伸ばせば、快適さ、楽しさというものはすぐ手に入りますが、あえて少し不便な状況を提供することで、色んな感性を持って感じたり考えたりしながら普段経験しないことに触れられると思うので、引き続きそういった学習を願

いしたいと思います。それから白山手取川ジオパークの魅力といえば、そこに暮らす人々の営みが深くかかわっていることです。先人たちが水の恩恵とともに生活してきたことが、今ここに暮らす人々を育てていることに繋がっていると気づかされるシーンがいくつもあります。例えば、醸造業が非常に盛んな地域であるということ。米麴を使った日本酒や味噌、醤油、酢などといった日本人には欠かすことができない発酵文化を大切にしています。さらには美川地区のふぐの卵巣漬は3年という期間をかけて、猛毒が抜けて珍味として食べられるようになりますが、未だその理由は科学的に解明されていないことから、ふぐの卵巣漬は禁断のグルメと言われているそうですね。時間をかけてじっくりと醸すことで、奥行きのある深い味わいになります。忙しい現代だからこそ、ヒト・モノ・コトとのかかわりの中で醸し合う。時間や空間に触れることが喜びになる。そういう気付きを得られるような気がします。感性を伸ばす学習は、これからの予測できないAIの時代を生き抜くためには、むしろ人間が人間らしくある姿を体感することがとても大切で、ジオパーク学習はそういったことを体験することに繋がると思います。とても楽しい流れになってきていますので、よろしくお願いいたします。

### ○市長(田村 敏和)

ありがとうございました。尾張委員さんよろしくお願いいたします。

### ○教育委員(尾張 勝也)

ジオについてですが、私が語り出すと、この時間が全部私で終わってしまうと思うので、ポイント的なこととお話させていただきたいと思います。まず、私は日本ジオパーク認定、世界ジオパーク認定のもっと前から、白山ろく少年自然の家を母体として、特に白山ろくの自然体験の活動、特に水に関わるような活動をたくさんしてきました。私の思いとして、少し苦言になるかもしれませんが、世界ジオパークになって、観光で人がたくさん来るという図式が強いように感じて、だからどうするのかということに対して、私は少し危惧のような思いを持っています。皆さんご存知のように、故山田市長が世界ジオになったからといって世界から人がたくさん来るというわけではない、それで白山市

のみんなが地元のおよさを再確認する、そういったふるさと教育であるということは何度も言っていたと思います。それを絶対私たちは忘れてはいけない。人が来ることありきで、それでおもてなしをしなくてはならないというような考え方ではなくて、今白山市の生活も含めた色々なことが、そのまま世界ジオパークに認定されるに値するものである。だから結局、新しい何かをすとか、何か整備するというよりも、今あるもの、今まで受け継がれてきたものをどういう風に、広くいろんな人にちゃんと伝えるかという、その伝え方をちゃんと考えるということであって、世界ジオになったから何かしなくてはならない、何か作らなくてはならないのではなくて、今まであるものを一度整理して、きちんと色々なニーズの方に提供できるようにしましょうよというところがまず一番大きいところだと思います。ジオは教育ですので、もちろん経済的な部分、観光的な部分、保護保全など色々な部分がありますが、教育という強い柱は、ぜひぶれないようにしていただきたいですし、我々もそういうふうな意識でやりたいなというふうに思っています。具体的な話でいうと、私はよく学校訪問で言うのですが、カリキュラムマネジメントという言葉があります。結局、学校の教育課程をどう学校で編成していくか、独自のいろんなものを作っているですよ、工夫してくださいよ、という部分で、やはりジオってものすごくチャンスだと思うのですよね。ジオというものをメインに、あるいはひとつの大きな柱としていろんな教育課程を作っていく。極端な話、本当にジオ科というものがあったらいいと思います。それで、小学1年生から6年生、中学1年生から3年生といった成長発達段階に応じた白山市のオリジナル教育課程、白山市のジオプログラムみたいなものをやっぱり作るべきです。言うのは簡単ですし、誰がやるのかなど色々大変なところが多いと思いますが、とりあえず市の統一として、最低限こういうジオに対しての活動、あるいは学習しましょうという基本的なプログラムに加えて、美川なら海がメインになると思いますし、山ろくなら山がメインになると思いますし、やっぱり地域に応じた地域特色ある教育内容、その二本立てで今後もっともっと教育の中にジオというものを入れていくべきだと思います。今は結構学校任せになっていて、各学校、総合学習の時間にやっています。学校独自でやっているのはいいのですが、やっぱり市として統一したようなガイドライン、あまり厳しいものではないので

すが、ガイドラインといったものを策定したらいいのではないかと思います。次に、先ほども生涯学習課長の方からもありましたが、ジオ部といますか、ジオクラブといますか、やっぱり子どもたちがよりジオにかかわれるように、普通の学校の教育課程の中でもそうなのですが、十分なことがなかなかできないと思うので、次の話にもなりますけど、中学校の部活にジオ部を作るとか、あるいは生涯学習の一環として、ジオクラブというものを公募で作るとか、そういうふうな形で子どもたちがより深くジオにかかわれるようなことができたらいいなと思います。個人的な思いとしては、白山ろく少年自然の家には「かもしかクラブ」というものがある、これはいしかわ自然学校でやっているのですけれど、通年、年間4回だけですが、同じ子どもたちが来ます。四季を通じていろんな活動をすることで、専門家にはならないけども、やはり自然について4回、継続的に同じ子どもたちが来ることで、いろいろな活動をして、子どもたちが成長していくという姿をやっぱり見えています。そのあたりは、清水教育長もおそらくご存知だと思うのですけれども、変な言い方ですが、県の施設がやっているのに、市が何もこういうことをやっていないので、やっぱり白山市もっと頑張りたいなと思います。もともと白山市立の少年自然の家がないということが、私は非常に不満なのですが、「白山ろくがあるからいいじゃないか」という意見もわかります。だからなおさら白山ろく少年自然の家の県施設ともうまく連携して、小学生から高校生までの子どもたちがもっと深くそのことについて理解し、体験があるような、そういうものも作ったらいいかなと思います。ほかに、細かいことがいっぱいあるのですが、私はジオという観点が、観光であるのか、教育であるのかといますと、ジオは教育、ふるさと教育だと思っています。白山市の人たちが、もっと地元のふるさと愛を強くするいいきっかけだと思っています。来訪者というのは、何かは学んでいくだろうけれど、教育的な来訪者に対しては、教育的な部分でなかなか強くできないなとずっと思っていました。白山ろくにしかないものを提供するのも当然いいのですが、よく考えると、そこで経験したことが来訪者にとって、自分のふるさとに帰ったときに、「自分の周りにもこんないいものがあるじゃないか」、「白山ろくのジオパークでやってたあれって、うちの周りでもできるんじゃないか」ということで、持ち帰った後にその人が地元で、ここで学んでいったこ

とを地域で生かすような、そういうプログラムをもっともっと提示したらもっといいのではないかということも考えています。以上です。

### ○市長(田村 敏和)

ありがとうございました。では次に小寺委員お願いします。

### ○教育委員(小寺 正彦)

私がまず思うのは、子どもの時からいつも毎年、パーク獅子吼に必ず行っています。大きくなってから、年に10回も20回も、場合によっては年に30回も行っているのですけれども、そこから見ていると、まず美川まで一直線にきれいに扇状地帯の農村地帯が見えるのです。昔から、この加賀平野は扇状地で島ばかり。島といいますか、村ですけれども、島がいっぱいある。そういうことを子どもたちにずっと教えていただきたい。そして、白山地内は関連であり、先ほど安川委員も言われたように、お酒、それから醤油、味噌、そしてお酢、そういうものをずっと作ってきました。その素になります米、酒米ですけれども、石川県の酒米の半分以上が白山市で生産されています。また、石川県の大豆や麦等の種についても、だいたい石川県には3箇所種場があるのですけれども、その半分以上が白山市で作っているようなことで、そのことをほとんどの人が知らない。それがあから要するに、そういう醸造事業が成り立ってきたのであって、そういうことをやはり生涯学習課のはくさん学び舎講座で、知らしめていっていただきたいなとつくづく思っているわけでございます。そして、もう一つは水です。手取ダムから順番に鶴来の方に来ていて、そこから各市町へ水を出しているのですけれども、一番遠いところはやっぱり能登の七尾等までやっている。そのことは、私たち昔はみんな知っていたのですが、私が子どもたちに話すと、「そんなところまでいっているの？」というようなことも聞こえてきます。そういうこともやはり子どもたちに、また青年たちにも教えていくというようなことを、生涯学習課でしていただきたいというのが私の願いです。簡単でございますけど、以上でございます。

### ○市長(田村 敏和)

ありがとうございました。それでは北田委員お願いします。

### ○委員（北田 朋幸）

学校訪問に行っていて尾張委員と一緒になのですが、子どもたちにもっともっと自然の中で勉強させたいという話をされていて、いろんなものを実際に手で触ったり、五感で触れることによって、やはりいろんな部分を知り得る。やはり危険なことも知らなければならぬし、こんなに自然って素晴らしいんだということも知らなければならぬし、自然ってこんなに怖いんだ、ということも知らなければならぬ。今はいろんなことをやっていたらいいと思って、できれば白山市の子どもたちにはみんな1回白山に登ってほしいと思っています。白山に登ることによって、やはりここからすべて始まっているということを教えてあげたい。あとはいろんな遊びですね、キャンプファイヤーもあればイワナ掴みもあれば、合宿のようなこともやりながら、やはり自然のありがたさを知り得る生活というものを知ってほしい。いろんなことを、こうやって先ほど、高校生とかにも、リーダー、ジオリーダーとしてやって欲しいというように、育てないといけないですよ、子どもたちを。小学校の頃からやっぱりそうやって、そういう、少しずつ、自分たちの近くから、いろんなところへどんどん離れて行って、最後は白山に登るとか、やっぱり美川の海に行くとか、そうやって楽しくなかったら、これは続かない話で、中学生・高校生にまで発達するっていうことは、やっぱりその中学生・高校生が小・中学校で「こんな面白いんだ、自然ってこんなに楽しいんだ」ということを知り得なければ続かない話で、せっかく世界ジオパーク認定されたことも、それは確かにありがたい話なのですけれど、それよりもやっぱり、今、自分たちのいる土地がどんなに素晴らしいかっていうことを、やっぱりもっともっと知らせてあげたいというのは、自分の思いです。

### ○市長（田村 敏和）

ありがとうございました。それでは竹内教育長職務代理お願いします。

## ○教育長職務代理人（竹内 千恵子）

まずもって、白山市手取川ジオパークの世界認定ということで、本当に皆さんと一緒に喜びたいなと思います。今ほどから、学校指導課と生涯学習課の取り組みをいろいろ聞かせていただきました。印象としては、一つひとつの取り組みはとても考えられているなと思うのですが、私の感想では、これが面で繋がっているのかなと。何か一つひとつの、花火的なもので終わってしまう。あるいは、その子とか、経験した子だけで終わってしまう。それが他の子と共有ができるのかというようなこと。そういうことをちょっと思いました。先ほど尾張委員の方からも伝え方の話がありましたが、例えば、学校指導課の最初のSDGs白山手取川ジオパーク推進事業の中で、市内全小学校で取り組んでいるのなら、3年生とか4年生とか学年を限定して、ピーノとかで市内小学校の合同発表会を開催する。各学校で各地域のことを調べてその成果を持って参加し、合同発表会で全体を見ると、例えば「白峰から美川への水の旅」が実感できる。「確かに白山市内を水が旅をしているんだ」、「水の旅なんだ」と子どもたちが感動する。各学校で終わってしまうのではなく、そういう機会を設けて、学びを共有していけるといいなと思います。あるいはそういう子どもたちの調べたことをDVDなどにして、例えば運動会などで保護者が学校に来たときに、運動会が終わった後に、涼しい教室でその発表の様子を見て帰っていただくなど、何か市民や保護者にもその子どもたちのやったことの感動や学習の過程が伝わるような、そういう取り組みというものをちょっと考えていけたらいいのではないかなと思います。一つひとつの取り組みはよろしいのですけれど、何かこの点を全部繋いで面にして、市民や保護者など、皆さんにお知らせできればいいかなというような感じがします。それから中学校については先ほどの尾張委員と一緒に、本流だけはきちんとやって、あとはそれぞれの学校の地域、文化のことを学習する。学習しっぱなしじゃなくて、それで何を学んだか、それをどうやって市民の方に、保護者の方にお伝えするか。そういうようなところをもう少しお聞かせいただくとよかったかなと思います。あさがおテレビもあることですし、とにかく子どもたちが感動して、その感動を他の学校の子どもたちと共有して、市全体が盛り上がる。盛り上がって来訪者が増え、「こんなすごいところなんだ」と認識して帰っていただく。まず白山市民が楽

しんで感動する。その感動が他の人にも伝わる、そういうことを思いました。学校も忙しいとは承知しているのですが、ちょっと工夫すれば楽しいことができるのではないかと思います。我々教育委員も、協力できることはぜひしたい。以上です。

### ○市長(田村 敏和)

ありがとうございました。それでは教育長お願いします。

### ○教育長(清水 茂)

私は教育行政を預かるものとして、まず、この世界認定ということが、実にこれは白山市らしい教育を進める良い契機になるのではないかなと思っています。学校教育のみならず、生涯学習においても、このジオ学習を進めていきたい。実はこの旨は、今般のこの白山市の教育の基本方針にも、組み込ませていただきました。今、いろいろ事務局から学校教育、生涯学習でやってきている事業の紹介がございましたけども、学校教育においては、特に今、尾張教育委員や竹内教育委員が言われたように、白山市にあるどの学校でも、このジオ学習をやっているのだと。そのために必要なガイドラインと先ほどおっしゃいましたけども、そういったカリキュラムの参考になるガイドラインは、この教育行政の私たちが窓口として作って参りたいなというふうに思います。総合、総合と言われますけど、社会科でもそうですし、理科でもそうですし、あと道徳科なんかにも絡める。そういう素材がこのジオ学習にはあると思っています。それから、座学に何か陥りがちだとか、何かワンパターンな授業形態になってしまいがちなのですけれど、ぜひ私はこれを体験的な学習、体験を取り入れたそういう学習が展開できればいいなというふうに思っています。そのためにも、私も県の自然の家に行ったので、少年自然の家を使うなり、そういう施設の活用もすごく大事ですし、本当に自然に詳しい、ジオに詳しい、そういうゲストティーチャーがこの市内にはたくさんおいでますので、そういった外部人材、先ほど企業の話も少しされましたけど、そういう企業の方にも手伝っていただいて、こういうプログラムが魅力あるものができればいいなというふうに思っています。それから生涯学習でいうと、市がこうやって音頭を取ってやるこうい

うジオ学習、これもよろしいかと思うのですが、来年度以降、コミュニティセンター化されますけれども、それぞれの公民館の中において、地域の特性に応じたジオ学習というの、やっていけたらいいのかなというふうにも思っています。ただ、これはすごく広大な理想の部分もあって、今一言で私はプログラムと言いましたけれど、プログラムを作るための人材育成というのはすごく大事で、公民館でいうと主事さんがいかにそういったノウハウを持って、ファシリテート、コーディネートしてやっていけるかというところにかかっている部分があるので、ここは本当にその人材育成という面では、社会教育でも頑張らなくてはならない部分なので、そういったところも力を貸しつつ、部局横断で進めていきたいというふうに思っています。竹内委員が最後に、これはまだ取り組みが点ではないのかと。確かにジオの事務局のジオパーク・エコパーク推進課の方では、推進協議会が母体になっているいろんな事業をやっています。ジオ遠足もそのひとつですけれども、そちらでもいろいろ教育普及の活動をやっているわ、こちらは今言っている教育活動をやるわということで、点でやってもしょうがないと思っていますので、ぜひ、竹内委員が言われるような面になるためにも、私はこれを市長さんの横で言うのもなんですが、教育委員会の中にそういう横・縦をつなぐセクションになるような、そういう組織が必要でないかなというふうにちょっと考えています。まだおぼろげですけれども、そういうつなぐセクションが必要かなというふうに思いますので、また検討していきたいと思っています。以上です。

## ○市長(田村 敏和)

ありがとうございました。皆様のご意見を伺いましていろいろ思いがあるのですが、まず、その教育ということを尾張委員も言われましたけれども、結局、世界ジオパークの認定とは何かと言うと、今まで白山市民が営んできた営みが評価はされる。でもこれは、何もしないでいると、それは当然、世界認定としてはいかなものかという話になりまして、世界認定になるためというよりは、教育を持続的にやっていくことで、白山市が住みやすい、そういうすばらしい市になっていくのだろうなということを思います。そういう意味で、先ほど尾張委員からあったジオ科という教科の話、私は前に言っていたが、

総合的な学習というものを、もっと白山市はジオパークというものに絞っているいろいろな取り組みをしてもいい。総合というと、何か本当に総花的にあるのではなくて、白山市は思い切って総合の時間をもっと絞り込んでやってもらって、そのためのガイドラインとなるような資料であったり、そういうものが作られればいいなと思います。また、それをやることで、竹内委員が言っていたその発表会ですか。発表会といっても、いわゆるどこかで集まってだけではなくて、いろんな形があると思いますけれど、例えばユーチューブで流して見てもらうとかいろんな方法あると思うのですが、やっぱり発表会という形で子どもたちが自分たちで感動して、それを人に伝えたいという気持ちを人に発表して伝えていくという、そういう場を何か作ってあげないといけないのだろうなと思います。それは先ほど教育長からもありましたが、教育委員会の中に繋ぐセクションということで、どちらかは別としても、市長部局側と教育委員会部局がこれからコミュニティセンター化していった場合も起きてきますが、それを何かつなぐことが必要なのだろうと。それはバラバラにならないで、何かうまく、有益になればいいなということも思いました。先ほどの、面の繋がりということですが、そういうものが必要ななと思います。ぜひ、まずそのジオ科じゃないですけど、何かジオパークの学習をしていく、そういうものを忙しくて大変なのですけど、何かしら必要なのではないかということは思います。小学校3年生、4年生になったら必ずこういうことをするといったような。例えば、枝権兵衛さんです。4年生になると必ず勉強しますので、実は七ヶ用水の方とお話をしていましたが、白山市の学校もいっぱい来るのですが、小松であったり、野々市であったり、白山市以外からもたくさん管理センターに来るらしいのですよ。そうしたら説明がすごくたくさんの子らで、白山の場合は、ジオパークのベースであるジオガイドの人たちが結構説明してくれるのですが、それ以外の市から来た場合は、管理センターの職員さんが全部説明することが最近すごく多くなっている。当然やっぱり体験学習とかそういうことも含めたり、あと手取川の頭首工の部分、手取川の取水口ですか。あそこの部分は、今回重要文化財に推薦されたりするぐらい本当に重要なところで、先ほど、獅子吼高原の話もございましたが、扇状地が広まっていくということで、そこから見ると用水がすごく張り巡らされていますよね。手取川七ヶ用水土地改良区の

皆さんが本当に苦勞してそれを全部維持管理していただいているわけですから、そういうことなどの勉強を、4年生になったら必ずやるようになっていきますよね。だからその前なども、本当は調べたものを発表する場があればいいかなと思うのですよね。前々からずっと、何かそういうことができないかなと思っていました。去年、日本ジオパーク全国大会があつて、なかなか観客も少ないということもありましたが、せつかく子どもたちが頑張つて、それを先ほど保護者の方もそうですが、市民の皆さんに何か広げられたら。やっぱり子どもたちが頑張っている姿っていうのは、大人に感動を与えます。実はここ最近、白峰や鳥越、美川の方だったり、松任ですと、青年会議所の方など、いろいろ若い方たちと話すことが多いのですけれど、一生懸命いろいろやっているのですが、その姿が本当にすばらしい。そして、オール白山という言葉を使いますが、その横の繋がりも持っています。このジオパークをやっていくことでオール白山というのはまさにそうだなと思っています。この地域だけの学びではなくて、例えば美川の学びが白山ろくの方に繋がって一緒に動くとか、そういう横の繋がりに広がっているだろうし、あながちこの旧松任地域は、なかなかジオパークのことが広がらないと言われますけれど、実はこの用水のことをひとつの水の旅で考えたらすごいほど繋がっているんで、これだけ先ほど、酒米の話など、いろいろお話いただいたけれど、大豆とか麦も本当に良質な種をこの白山市が作っているんで、これは私も最近農協の方とお付き合いするようになってよくわかってきました。本当にすばらしい農産物をたくさん作っています。これも全部ジオパークの、最初に安川委員が言っていたように、水と人々の関わりの中で、不便な状況もいろいろ経験しながらも、人々の営みが歴史や文化を作っている。これもジオパークの大きな構成要素ですから、そういうことも本当に学んで、市民に広げていくということが必要だなと思いました。そのためには、私も教育委員会部局と市長部局の繋がり方ですね。このあたりはどうですか、教育長。

## ○教育長（清水 茂）

今も繋がっている部分はあるのですけれども、こういった取り組みが教育委員会だけで消化するのではなくて、先ほどの発信の話も含めて、発信の場があ

りますか？というような話も、ジオパーク・エコパーク推進課の取り組みの中でもしかしたらできる場合もあるので、定期的にそういう集まりをジオパーク・エコパーク推進課とやっていたらいいのかなと思っています。

## ○市長(田村 敏和)

尾張さん、どうですか。

## ○教育委員(尾張 勝也)

結局、横の繋がりがって文書とか情報ではなくて、やっぱり人だと思うのですよね。だから、教育委員会にいて教育委員会メインですするというのではなくて、中間ではないですが、どちらにも所属しないと、コウモリみたいでなおさらいい加減な意味ではなくて、本当にそれを繋いでいける人々なり、特別な部局なり、何かそういったことをやらないと、これは各課とか各部局でやって横の連携をとりましょうという言葉だけではちょっと難しいような気がするのです、そういう意味での機構そのものを、若干教育委員会内も僕は変えて欲しいなというふうに前から思っています。先ほど、市長の言われた七ヶ用水のことについては、僕も本当にすごく面白いと思っていて、ただ皆さん、北田委員も言われたように、やっぱり楽しくないと駄目なので、こんなこと言うのも何ですが、学校で何か調べ学習とか、勉強的なことばかりやっているのは面白くないのです。だから、七ヶ用水に行っても「網の目のように広がっている」とか、すごいですが、体感できないとか実感できない。だから何をすればいいかという、私は七ヶ用水の中を歩けばいいと思うのです。溺れるではないか、という話ですが、年に1回水が止まる時がありますよね。私はその時に、子どもたちと何回も行っていきます。東明小学校の時も行ったし、明光小学校の時も行ったし、絶対水が来ることがないので、暗渠などは危ないけれども、普段行けないところに行ったら、やっぱり七ヶ用水というのをすごく肌身で感じる。水が少なくなると、昔は一大行事として地元の人々は網を張ったりしてアユやヤマメを取っていました。私も行ったことがあります、そこまでやらなくても、そういうふうにやっぱり子どもたちが楽しくやりながら、でも後で振り返って考えたり、自分が学んだことがわかったりといった、そういうことを

ももっともとしていく。細かい話になっていますが、私は子どもたちと七ヶ用水の水が引いたときに行ったとき、水が少ないと、アユや逃げてきた金魚など、いろんな生き物がいるのですが、それと同時にゴミもいっぱいある。自転車などがある。いつもは見えないけれど、学校の横に沈んでいたりもする。これは遊びと同時に、その環境的な部分についても学べて、ものすごくいいなと思っています。水は本当にいいと思いますよ。小水力発電とは言わないですが、そういうエネルギー的な部分でも、題材になりそうな気がします。これは良いかわかりませんが、以前、能美市の子ども会と思われる団体が用水をゴムボートで下るということしていました。絶対に潜ったりしないような危なくないところを、ゴムボートで下るということをやっていて、面白いことをしているなと思いました。それがいいか悪いかはわかりません。それがきっかけで、子どもたちが用水の近くに行くと亡くなってしまったら困りますし、難しい提示ですが、今言った七ヶ用水ひとつにしても、今までの調べ学習的な部分だけではなくて、何かもっと面白く遊びながら、体験しながらできることが、ほかにもいっぱいあるのではないかなと思っています。竹内委員も言いましたけれども、そんなちょっとした何か工夫とか気づきで、今までやっていたことがものすごく子どもたちにとっても、あるいは大人にとっても、そういう何かを学ぶということは、みんなでこう考えていって、アイデアを、知恵を、出し合えばいいのではないかなというふうに思います。それともうひとつ大事なことがありますよ。一つすごく大事なことは、体験を推進すると、子どもたちも大人も外に出る機会が増え、どんどん外に出てくださいよ、だけだと私はちょっと無責任だと思うのです。何かといいますと、安全教育をちゃんと今までよりも強化する。具体的に、私は今、実は白山消防署などとタイアップして、小学校5年生などに対して、救命救急の授業をもう3回ほどやっています。例えば、小学校5年生以上だったら、胸骨圧迫でさえできるというデータなどがあって、そんな授業も今していて、うまくいったら教育長にも見てもらおうと思っているのですが、そんなことや、ちょっとけがしたときに、自分で圧迫止血して、絆創膏を貼ることができるとか、具合が悪そうな人がいたら、木陰や日陰で休んだ方がいいよとか、何か子どもたちが、これは大人もですが、自分でセルフエイドとかセ

ルフレスキューとか、そういうことをこの機会にできるようにする。こんなジオと救急が一緒になっているところは市として、絶対面白いと思うのです。ジオと防災はいろんなところで一緒にやっています。でも、体験が増えるから、救急までやって、子どもたちが自分たちの体にもっと安全ということを意識して、自分たちである程度のことができるようになるのはとってもすばらしい。白山市の子どもは、何かあっても全部自分たちで血とか止められる、かっこいいなあと思って。そういう意味でも推進と同時に、安全に対してもっと強化する。推進が例えば攻めだとしたら、その安全の学習もどんどん広くやっていくことは守りの部分で、攻守のバランスを取ってやるというのはいいのではないかなというふうに思います。

#### ○市長(田村 敏和)

委員のみなさん、他に何かありますか。

#### ○教育長職務代理人(竹内 千恵子)

認定受けたばかりなので、いろんなことが始まってスタートしたばかりで、いろんな問題点も出てくると思うのですけれども、あまり焦らないでください。行政の方もやることは、いっぱいおありだろうと思うので焦らないでほしい。ただ、私たちの思いとしては、子どもたちに感動を与えたい。何かジオですごく誇らしい気持ち、自分たちの住んでいるところを学習していて誇らしい気持ちになって、最終的にはふるさとを愛すると。そういうようなところにいけばいいので、市民の皆さんも巻きこんで、あんまりたくさんいっぱいいろんなことをやろうとしてもまだ始まったばかりなので、私たちもまた、できるだけ協力はしていきたいなというような感じはしています。

#### ○市長(田村 敏和)

それでは、私としましては教育委員会の方で子どもたちの学習、そして生涯学習の面で、また様々な市長部局との連携をとって、しっかりお願いしたいと思っています。とにかく感動という言葉がよく出てきたし、子どもたちの感性を育むということを中心に教育委員会はやっていただいていますので、ぜひそ

の辺のところを、感性豊かな子どもたち、そしてふるさとを愛する子どもであり、大人であり、育てられるよう、またよろしくお願ひしたいと思ひます。

---

### ◎協議事項

#### ○市長(田村 敏和)

では次に、協議事項(2)「中学校部活動の地域連携及び地域クラブへの移行について」であります。事務局より説明をお願ひいたします。

#### ○学校指導課長(東海林 幸男)

(資料にて説明)

---

### ◎意見交換

#### ○市長(田村 敏和)

それでは委員のみなさんから、ご意見いただきたいと思ひます。安川委員さんからお願ひします。

#### ○教育委員(安川 薫)

はい。ご説明いただいた資料を拝見して、資料3にある中学校部活動の状況の地域の協力の状況というところで、思った以上に少ないのかなという印象があったのですが、この今協力していただいているところというの、ごく最近、新しく加わっていただいたところとか、それともそれ以前からしていただいているところとか、両方があるということなのですか、というところをまずお聞きしたいと思ひました。

#### ○学校指導課長(東海林 幸男)

安川委員の言われる通り、もともとおられた方もいれば、最近こういうような動きに乗って来られているという方、それぞれいると思ひます。

## ○教育委員（安川 薫）

ありがとうございます。あとは、今ずっと学校の先生方が担ってきたださっている部活動の役割なのですけれども、地域を含んだ活動に位置付けをしていこうとする中で、やはりそこに対する理解とか応援ということを考えたら、各ご家庭からの協力はどうしても必要になってくるかなというふうに思います。自分の子どもが大会などに出場することがあるときには、その会場に足を運んで、子どもの姿を見たい、と実際に見に行くということをされると思います。私も実際に見に行きましたし、子どもが所属している部活動に関心を持っている方というのは少なくないと思うのです。だけれども、サポート側として保護者会がないということは、やっぱりまだまだ学校がやってくれるのが当たり前という感覚になるのも仕方がない話なのかな、ずっとそういう状況が続いているのかなというふうに感じます。ただその今、学校側がやってくれるのは当たり前というところから、方向転換をしていくということに対しても、ちょっと時間と労力は割く必要があるような気がしています。あとは体験格差が広がっているということも最近特によく聞かれるのですが、部活動だけが体験ではないと思います。部活動の地域移行に伴って、ご説明にもあったような所属人数が少ないとか、選択肢が狭くなるということは前々から言われていますけれども、今後はもうそれ以上に部活動の領域を超えた選択肢を置くことによって、今後もたらされる可能性というのがあるのではないかと思います。先のテーマにも準ずるのですけれども、白山市だからこそ可能な体験活動というのが、今後ますます広がっていくことが予測される中で、これは大きなチャンスととらえて、ジオパークの活動もその一端を担う期待があります。あるいは普段という頻度で子どもたちが学校以外の場所に行って活動する、ということを経験したときに、やはりそれぞれの家から近い場所というところになると、コミュニティセンターを利用して、地域クラブやボランティア活動への参加ができるのかもしれないなというふうに思います。本当に課題がたくさんあると思うのですが、周囲の市町と足並みをそろえるのがベターなものもあれば、白山市のオリジナルの活動、あるいは他の何かというところで、選択肢としてはむしろ増えるのではないかなと思いますが、いかがでしょうか、という意見です。

## ○市長(田村 敏和)

ありがとうございました。それでは尾張委員お願いします。

## ○教育委員(尾張 勝也)

私がかねがね言っていることは、小学校ではいろいろ多様な活動しましょうねと言いながら、中学校になると、何か勉強か部活で頑張りましょうといったように、すごく狭められている。自分自身がそうだったのですが、何か勉強か部活でどちらか頑張らないとだめ、みたいな中で、私と北田委員はいつも言っているのですが、やっぱり遊びみたいに、遊びと言うと、ちょっと言葉がどうしてもいろいろ誤解されやすいのですが、遊びというのは、やっぱり内容とかルールとか場所とか、全てのことを自分たちで作っていく活動ということです。自分たちでそのルール等も変更しながら、自分たちがメインで作っていく活動。残念ながら部活動にしても、学校の何かにしても、スポーツにしても、大人の管理のもとにやっていく。それはそれで大事なのですが、全てが大人の管理ではなくて、やっぱり子どもがもっと自主的、自立的にやる時間というのはとても大事です。私はやっぱり本来、中学校、高校になったらもっとそんな時間が増えなければいけないのに、今、日本の教育的には、大きくなればなるほど、堅苦しくなってくるといいますか、自由にいろんなことがしにくくなってきているのかなと思っています。そう思ったときに、この部活動問題というのは、そこに新たな視野と言いますか、大変なことでもあるけれど、うまくいくと今までに克服できなかった課題を克服できるチャンスでもあるのかな、というふうに私は思っています。先ほど、ジオでも言おうと思ったのですが、例えば自然の活動にしても小学生より中学生、中学生より高校生ですと、当たり前ですが、よりレベルの高いことができるのですよね。その遊びの質もすごく本格的と言いますか、ものすごい活動ができるので、これを機会に今、選択肢が広がると安川委員が言いましたが、内容も含めて何かそういう部を新しく作ったりもできないのかな、具体的には、本当に私はやっぱり、ジオ部というのを作ることがすごく理想です。理想なのですが、いいなというふうに思っています。その一つの大きな理由は、ジオ部というのは文化系、スポーツ系

の両方を兼ねるといふことなのですね。文化部、スポーツ部ではなくて、その中身がものすごく多様であるということ。学習的なものや研究的な部分から、いろんなアクティビティーとか活動に至るまでものすごくできるので、白山市でジオ部を作ると、ものすごく面白いことになる。極端な言い方、山に登っても、川で遊んでいても、それも全部、部活動の一環としてもできるし、研究活動とかそんなものも全部できる。私はジオ部といいますか、ジオ活動というものを部活動とどういうふうに繋げるかわからないですけれども、繋げるとものすごく可能性があるのではないかなと思います。それも含めて毎日部活動しなくてはいけないのかどうかという問題も自分の中では少しあります。基本的に平日は毎日なのでしょうか。

**○学校指導課長（東海林 幸男）**

1日休みです。

**○教育委員（尾張 勝也）**

1日休みがあるけれども、ほぼ毎日ですね。例えば週3日ぐらいしかしないというような部もあってもいいのかなと思います。でも空いた時間はどうするのだという話もまたあるので、例えば、文化部とスポーツ部、二つ入ることはできるのでしょうか。

**○学校指導課長（東海林 幸男）**

できるのですが、ほとんどいないです。

**○教育委員（尾張 勝也）**

だからそれも、週に何回かしか部活動の日がないなら何かそういうふうに、自分のやりたいことを複数選ぶということもできるのかなと思います。ただ競技力向上ということを見ると、それはあまりよろしくないのだろうけど、多様な経験などということを見ると、そういう選択肢もあるのではないかなというふうに私は思っています。ちょっとうまく言えないのですけれど、単に部活動問題だけではなくて、中学生の日常の中に学校と部活動と習い事があつた

ら、習い事とそれ以外に、やっぱりその遊び的要素と言いますか、自分たちで何かできる要素が強い、そういう時間がこれを機会にできると私は面白いのではないかなと思います。ただ、一つ問題はやっぱり指導者の問題で、地域の人とかもいろんな・・・でもジオだったらそれぞれの専門家、釣りの好きなおじさんとかもたくさんいたりするので、そういう人もみんな指導者になるし、地域の指導者にも事欠かないのではないかなと思います。ただ、学校の先生の指導者がそれだけいるのかということになると、なかなかいないので、私はこういうジオ関係の部活動ではないけれど、そういうことをすることで、学校の先生でやっぱりジオのエキスパートを育てていきたい。これは、先ほど本当は言うべきことだったのですが、正直言うと、私たちの下の年代にそんな人がいない、後継者もいないのです。だから、やっぱり私もいろんな自然体験活動が好きでいろんなそういうことを考えている。そして今も活動している。そして教育に携わって、自分が思っている大事なことを子どもたちに伝えていく。そういう指導者が、もちろん社会教育もそうですが、学校の先生にもいてほしい。

「あの先生は理科の先生だよ」、「あの先生は国語の先生だよ」と小学校や中学校でよくあるのですが、「あの人がジオの先生だよ」というような、そんなエキスパートが、本当は私も現場にいたらなりたかったのですが、本当に今後、指導者としてそういう先生も市としてぜひ育成して欲しいですし、私もそういう人を育成していきたいなというふうに思っています。ちょっと話がずれたところもありますが、以上です。

## ○市長(田村 敏和)

ありがとうございました。では次に、小寺委員をお願いします。

## ○委員(小寺 正彦)

昔、半世紀以上前、小学校から中学校に行く時、どのクラブ入ろうかなあと本当に悩んで、本当にクラブができることが当時嬉しく思っていました。そしてそれから半世紀以上経って、今年も3月や2月ごろ、近場の町内の、小学6年生の男の子にクラブといいますか、野球をしている子がたくさんいるので、「来年から鶴来中学校の野球部、強くなるなあ」と言ったら、鶴来中学校の野

球部に行かないというのです。とても驚きました。「小さいときからずっと野球をしているのに、どうして中学校の野球部に行かないのか」と親御さんに聞いたら、やっぱり地域クラブの方へ行くということです。時代はやっぱり変わったのです。このアンケートをまず見て、Q3で「②指導経験、活動経験もない部活動を担当している」先生が96名で56%の半分以上、そしてQ5の「③休日は、学校業務以外の活動には参加したくない」が66%で3分の2という結果に、昔、そんなこと全然私は思わなかったのですけれども、休日は今の若い先生方はやっぱり家庭第一で、クラブ活動とかそういうことに携わっていきたくないということが、このアンケートを見ると一目瞭然になっているのではないかなと思ったのです。そしてQ4「④概ね2時間以上の仕事をしてから帰宅する」先生は34%で、概ね1時間から2時間以内を含めると約50%強の先生方は部活動終了後、帰宅までにやっぱり時間がかかるのですね。そうした場合、どうしてもやっぱり地域移行は必要になってくる。そして、地域移行にしても、私は今まで地域移行になった場合、失礼ですが先生方の半分以上が指導員になると思っていました。半分以上の方が指導員になると思っていて、指導員になったら、兼職兼業の問題が出てきますが、それはこの表に出ているように、文科省が認める。そして手当も少しなりに出るようになった。本当に嬉しく思ったのですけれども、やはり時代が変わって、先生方自体がクラブ活動にそれだけ重きを置けない環境になってきたというようなことで、地域移行にするにはやはり先ほど言ったように小学生の子どもたち、児童の子どもたちには「どういう地域のクラブがありますよ」と選ぶ機会をたくさん与えて、親御さんと相談しながら選んでいただく。そして地域の指導員の方もしっかりやっていただく方を決めていただいて、また、資格を取っていただくというようなことをしながら、指導していただきたいなと思った次第です。だいぶ大変なことだと思いますけれども、やはり早々に始めないと、そういう指導員を集めるのは大変になっていくのではないかなと思った次第です。以上です。

## ○市長(田村 敏和)

ありがとうございました。それでは北田委員お願いします。

## ○委員（北田 朋幸）

地域クラブに入る子達は、小学校の頃から流れができています。だから学童の指導者が地域クラブの指導者に良い選手が育つと引き渡すようなことが多くて、普通のそうでない子たちは中学校へ入ってじゃあ何すると思うのだけれども、だんだん人数がいなくなって、部活がなくなって、バレーボールがしたいけど、バスケしかないとか、バスケットボールがしたいけど、バレーボールしかないとか、そういういろんな悩みがあつて、なかなか自分の思ったスポーツができなくなってきてしまっているというのが実情で、多分今は、例えば光野中の男子バレーに行きたい子はやっぱりそうやって集まりますね、光野中には。そういう子達はそれで部活してくれるのだけれども、基本的に何もしていない子は中学入ったら、何部があるか探してその中から選ぶことになります。親にしても、学校へ行って、その授業が終わって部活をするから、安心して出せるのですが、これが地域クラブだったら一旦帰ってきて、ちょっと小腹が空いていたら何か食べさせて、またその場所まで連れていかなければならぬということまで果たしてできるのか、と思うと、なかなかそういうことも厳しくなっていくのではないかと思います。多分尾張委員が言っている、ジオ部みたいなものができる、と、やっぱりそういう方面に興味を持っている子達が集まってくれる。白山市としては、そういう子が育ってくれることはものすごくありがたいことなのですが、多分、今まであったその学校のスポーツ部や文化部に関しては、だんだん廃部をせざるを得ない状況になります。私は最初からこれは部活をなくす気だな、国の政策が部活というものをなくすつもりなのだというふうに思っていたので、まんまとそんなふうになってしまっているような気がします。先生が中学校に異動して、〇〇部の顧問がいなくて、〇〇部の顧問になって、というときに自分が全然知らない部活を、今までは教えることが好きな先生は本当にそこからでも一生懸命その部活を勉強して、子どもたちと一緒にやっていたのでしょけれども、そういうことをしてまで、部活の顧問をする先生もやっぱりいないということですね。悲しいけれども、今まで残っている強い伝統がある部活でないと、今後は残りづらくなるのではないかなというふうにちょっと思います。でもそれはもう、どうしても人間も減ると、やっぱり世間もそういうふうの流れでいっているのだと思うので、白

山市が持っているものであったり場所、体育施設であったり、いろんな道具をうまく集めて導いて部活を作るかどうかという話になっていくのではないかと思います。

## ○市長(田村 敏和)

ありがとうございました。それでは竹内教育長職務代理をお願いします。

## ○教育長職務代理者(竹内 千恵子)

今、皆様のご意見をお聞きしていて保護者とか地域の人を目線かなと思うのですが、私は学校サイドにしたら、教員は例えば教員免許をもらうときに外国語でもらう、国語でもらうわけですよ。理科でもらう。別に野球でもらうわけでもないし、吹奏楽でもらうわけでもない。なので、その先生方に、競技力を求めること自体が、ちょっと無理なのではないかなと私は個人的に思います。アンケートの結果、指導経験のない顧問が56%です。もう片方の選択肢は長く指導経験があるとのことですが、それを専門にしていたかどうかわからないわけですよ。とにかく、教員になってからずっとやっていたから、ずっと見ているというだけの先生もここに多分入っているので、時代が変わった、社会が変わったと言いますが、やっぱり私たちはこれから部活動もサステナブルでないといけない、持続可能かどうかということを考えて、やっていくべきではないかなと思います。先生方も昔は子どもと一緒に野球していてもいいのですが、今はもう教材研究がどうか、研修がどうか、提出物がたくさんあるとか、いろんなことが入ってきているので、それはもう今までと同じことをしようとしても、無理なのではないかなと思うのが私の考えです。我々も何か地域移行と言ったら学校で今やっている部活動をそのまま地域に持って行って、ピースを埋めるみたいに、どの子のニーズにも合うようなことをしよう、とそんな発想していたら、それは多分無理なんじゃないかなと思います。受け入れる団体の動きもわからない。文科省は、学校のほうから見て、こうしたいですと言っているだけで、協力団体がどんな動きをしているのか私たちはわからない。今あるものをどこかにそのまま当てはめていこうというのは多分無理で、小学生も高校生も放課後はフリーなのですよ、基本的に。塾に行く子は塾に行

くし、家でテレビ観る子は家でテレビ観るし、運動したい子は運動するのですから、どうして中学生だけきちっと放課後も学校に残して、枠に閉じ込めてみたいなのをしていたのか。私たちは、今まで家に帰ったら悪いことをするのではないとか、そういう子守り的な役割を学校の先生に求めるというのは、発想を変えていくべきなのだろうと思います。その代わりに、先生方にはもらっている免許状のことはきちっと指導していただく。英語の免許を持っている人は、英語の指導をきちんとやるべきではないかなと思います。1番で文部科学省が言っているこのスポーツ、文化芸術活動に継続して親しむことができる機会を確保する、これだけは確保してあげなければいけないと思うので、地域に帰ってやる子もいればいいですし、学校の勤務時間にフリークラブみたいなものを例えば一つ作って、どの先生がではなくて、今日は英語の担当で、英語の先生が英会話をするとか、今月の月曜日は体育の先生が、サッカーボールの蹴り方を教えるとか、音楽の先生は音楽鑑賞するとか、国語の先生は読書会をするとかで良いと思います。どうしても「お茶とかお華とか、うちの学校はやりたいです」というところは、外部講師を実費で雇って、顧問には都合のよい先生をお願いするぐらいの緩やかな気持ちで勤務時間内に終わるようなことをする。生徒も自分たちで判断して、放課後を過ごすことを考える。非行に走ってしまうとかの不安や心配、子どもたちを信用していないのは別の問題だと思います。非行に走らない子もいるのです。それはもう補導員などで考えることであって、学校の先生にそこまで求めてもサステナブルなのかな？と思います。これからはそんなことを私たちは求めていいのだろうか、そういうことは、学校の教員ではないのですが思います。

### ○市長(田村 敏和)

ありがとうございました。それでは教育長お願いします。

### ○教育長(清水 茂)

委員の皆さんのお話も聞きながら、なかなかハードルがいろいろあって、大変な課題なのだなと改めて思うのですけれども、先ほど安川委員さんが言われたように、私の時代ももちろんそうなのですけれども中学校は勉強と部活です。

ずっとそれが長い年月、もう50年と言われましたけれど、それが本当に当たり前になっている中で部活動を地域移行にするとか、部活動をなくすといったことをするには、拙速にはまだ動いてはいけないような部分もあって、何を言いたいかという、受け皿になる地域の人であれ、クラブの人であれ、もちろん保護者であれ、本当にもちろん子どもでもそうなのですけど、自分たちの中に課題をしっかり持った当事者意識というのが育まれない限りは、なかなか思うようにはいかないと思っています。そういう意味で私は地域でも中学生・高校生のボランティアサークルを、20年ほど面倒をみているのですけれど、その受け皿とか居場所づくりという必要性や魅力というのは、私はすごく体験的に感じています。先生とは違う地域の人が自分たちの面倒見てくれるという一種、他人の良さといいますか、そういうのはすごく私も感じます。繰り返しですけど、そういった人たちを増やす当事者意識を持った地域の人たちを増やすためにはどうしたらいいかという、私はちょっと荒療法なのですけど、先ほど尾張委員は今の中学校の平日の部活動の日数も、平日が5日間あるうち1日休みで4日なのですけど、それをもっと短縮化させていく発言をしました。そういう方向も一つはベクトルとしてあって、これは実は、二股かけているのです。一つは、やっぱり教員の働き方改革。竹内委員が言われた本来の教材研究とか研究に専念できる教員の放課後の時間を確保するというのが一つの狙いです。もう一つがさっきから言っている2日間も放課後、中学生が余暇の時間が増えた時に、これは保護者もそうだし、地域の人も、部活動といたら、いろんな我慢強さとか協調性とかが育つ、そういう体験ができていた時間がすっぱりなくなっていくようになって、これはどうしたらいいのだろうかということになる。そこが乱暴なのですけど、地域の人に考えてもらうような、そういう投げかけにもなるかなと思ったときに、平日の部活動の短縮化というのも視野に入れて、そして一方では、もちろん子どもの受け皿を探っていくような、そんな実証を、今年から9月から実証するって話もありましたけれども、そういうことを重ねながら、ちょっとやっていくというのもありかなという個人的な思いもあるのですけれど、思っております。繰り返しですけど、部活を50年ずっと続けてきて、それが当たり前になって、そこで本当に培われたものもいっぱいあったと思うし、本当に義務教育の中での部活動ということ考

えたときに、中学校3年間という放課後というのも、私たち教育に関わるものとしては、本当に手放しで「はい、任せたよ」とは言えない部分が今あるので、何か考えながらやっていかなければいけないなというふうに思っております。ただ、のんきなことも言っていないということもあるので、令和8年に向けてどんな形を作っていけばいいのか。段階的に進むのだったら、そういう段階の見通しも、これからいろんな人に聞いて、進めていきたいなというふうに思っております。

### ○市長(田村 敏和)

いろいろありがとうございました。前々からこの話をずっとお話されてきて、地域移行という話がありましたが、まず部活動というものに対する考え方は様々あると思うのですけれど、私が中学生のときは、部活は全員入らなければいけないということはなかったもので、入らない子もいれば、入っている子もいる、部活はあくまでも任意というのは大前提ですよ。そこに国が施策として部活動とクラブ活動は分けて考えなければいけないのですけれど、クラブ活動が教育課程に入ってから、部活動とクラブ活動の一本化という話が出てきて、全員が部活動に入ること、イコール、クラブ活動という授業をちゃんと受けていますよというふうにもなってきたのですよね。それでみんなが入ることになっていたのですけれど、もともと部活動は入らなければいけないということはどこにもなかったのです。今の学習指導要領には、部活動は入らなければいけない、作らなければいけないということは、どこにも書いてないのですよ。でもこれは長年の日本の文化として、部活動という文化が作り上げられてきているわけですね。だから部活の中で放課後時間が余ったな、何か悪いことするのではないかと、これはもう今の子どもたちはそんなことを、全然何もしないことはないと思いますけれど、そんなに心配は必要ないですし、逆に、先ほど学校指導課から出た資料の中に、いわゆる地域クラブとか、いろんなところに行っている子がすごく増えていますよね。今年、白山市は全員入部するというをやめて、好きなところに行ってもらうことにしました。そうしたら、結構いろんなところに行っているみたいで、全然行っていない子もいると思いますけれど、今行っていなくても、これからまた行くかもしれません。その中に、

先ほどから出ているコミュニティセンター化された場合の生涯学習の中に、例えば、「うちのコミュニティセンターは、ジオパークについてこういう勉強会をしますよ」という講座を設けたら、そこに子どもたちは行けばいいのです。ジオ部というより、ジオパークの学習を生涯学習としてすればいいので、そこに子どもたちは今日帰ったらコミュニティセンターに行って、そこで今日は尾張先生が来て、今度は尾張先生と土曜や日曜に山に行つてというふうにしてもいいわけですよ。これはいくらでも、今でもすぐできる。そういうことと、今やっぱり皆さんが持っている部活動という概念を、地域移行するという概念は非常に複雑なことなのですが、今回かなり県体予選の中に、クラブチームが結構出だしてきています。例えば、こっちのバレーの子が津幡のチームに入ってバレーで試合出ているとか。これがスタートしてしまつて、次は何をしているかという、結局部活動は学校単位じゃなくて、やりたい子たちが集まつてそのチームになっていくということです。もうそこに移つていってしまったので、これからどんどんいろいろ考え方を変えていかないといけないでしょうね。私が1番びっくりしたのは、鶴来の生徒が剣道で小松のチームに入って県体で優勝したということです。そういうチームまで今できています。多分、こういうことは一般的に皆さんはわからないので、学校関係者はそれを注目して見ていると思います。こういったことが、これから全国的に起きてくるということです。そのために今度モデル地域を作つて、白山市は9月以降に、どの競技でやるかは別として、また何か地域クラブ化していくのはこれから増えていく。ただ今までも実は似たようなことがあつて、例えば、バドミントンがしたいと言つたら、美川中学校区ではない子たちが美川中学校へ結構来ています。これはもう本当に一緒に、美川中というクラブなのです。地域クラブもそうなつてしまつていたので、ある意味少しずつ進んではいたと思います。今回解禁されたので、「さあ、やるぞ」というやる気のある先生は「じゃあ、バスケットの〇〇チームを作るからここに集まろう」などと活動すれば、大会も出られる。そういうふうにならば今からどんどん変わっていくと思います。ただ問題は、行政として考えなくてはいけないのは、保護者に費用的な負担が増すのではないかということです。部活動という中で、白山市は大会に行くときバスなどを出していますよね。こういうものは、クラブチームになつたら保護者の負

担になっていくと思います。ただそう言いながら、水泳はスイミングという形で、保護者の方が皆さん負担してやっていますので、水泳も早くから中学校の部活から地域クラブに移行してしまっている競技の一つだと思います。だから競技によって、いろいろ違いがあるのだろうなということは思っています。これから9月に入ったらぜひ、いろいろモデルとなる部でやってみて、そこでまた課題を出してもらえればいいなというふうに思っていますし、なにせ子どもたちがやりたい活動をしっかりやれるように、生涯学習も含めて考えていって欲しいなということが私の正直な思いです。今度コミュニティセンター化していく時に、生涯学習部門をどうするかという生涯学習の中で、例えば先ほど尾張委員が言ってくださっているジオ部という考え方をしてもいいかもしれません。それ以外でも、普通に囲碁・将棋でもいいですよ。そういうところへ中学生などが入って行ってやってもいいです。いろんな形がこれから変わり出していくのだなということが、今日皆さんのお話を聞いてすごく思いましたし、行政としてその辺はまた、必要な部分は必要な部分で考えていかないといけないなと思います。どうもありがとうございました。部活動について皆さんよろしいでしょうか。

## ○委員

はい。

## ○市長(田村 敏和)

最後に、その他について何かございますか。————— では、本日は貴重なご意見、どうもありがとうございました。大変有意義な意見交換となったと思います。これからも皆様方に、本市における教育行政を進めて参りたいと思っております。それでは進行を事務局に戻したいと思っております。

## ○教育総務課長(米木 伸一)

それでは皆さまどうもありがとうございました。本日協議いただきました議題につきましては、皆さまからのご意見を参考に今後の事務事業を進めて参りたいと思っております。これを持ちまして、令和5年度第1回白山市総合教育会議

を終了いたします。どうもありがとうございました。

---

**閉会 午後4時50分**